

＝もっと知りたい！＝ サクシュ琴似川

A サクシュ琴似川 いまむかし

札幌の中心部を流れる川というと、何を思い浮かべますか？豊平川、創成川・鴨々川でしょうか。あまり多くはありません。その中で、サクシュ琴似川は中心部を流れる数少ない川のひとつです。この川は現在、北海道大学キャンパスの南端近くで地表を発し、構内を北西へ流れ、桑園新川を経て琴似川に合流します。その後新川へと繋がり、最後は石狩湾にそそぎます。

かつて札幌には、ほかにこのような川が流れていました。都市化の進展とともに多くは姿を消しましたが、サクシュ琴似川は今も往時の面影を伝えています。どうしてここに川が流れたのでしょうか？この川が今も水をたたえているのはなぜでしょうか？そのわけを探ってみましょう。



中央ローンを流れる清流サクシュ琴似川／昭和3年頃
(北海道大学文学部蔵)

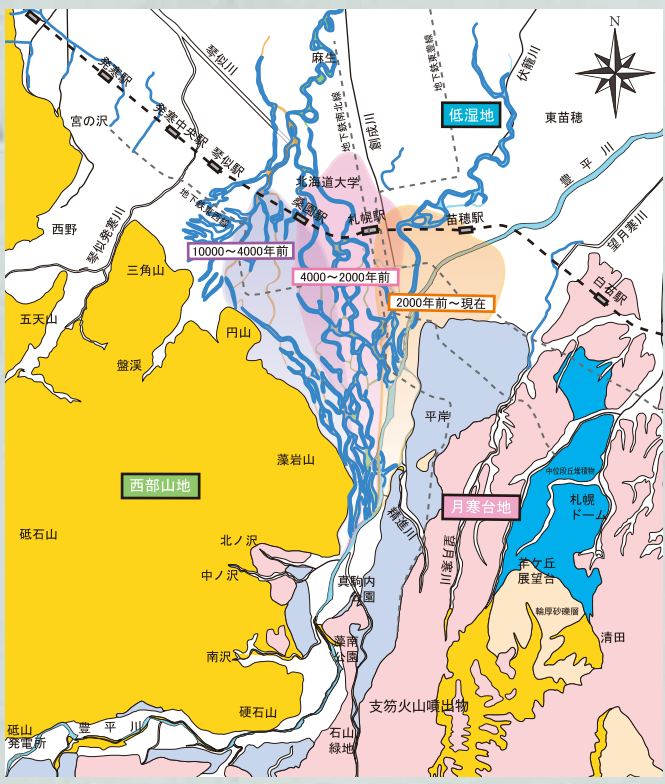
B 川とまちの成り立ち

札幌の中心部は豊平川によって作られました。正確には、現在の豊平川になる前の古いサッポロ川です。古いサッポロ川は網の目のように流れ、長い年月をかけて流れを変え、原野を開きました(下図)。「豊平川扇状地」です。古いサッポロ川はその後、伏流水となって地面の下に潜りました。伏流水は、現在のJR函館本線のあたりで地表から泉となって湧き出ます。湧き出た泉はアイヌ語で「メム」と呼ばれました。そのようなメムの一つから湧き出て流れたのがサクシュ琴似川です。

中心部にはほかにメムが幾つかあり、同じように小さな川の流れ(湧泉河川)を作っていました。小さな川は、古いサッポロ川の網の目の跡を流れたとみられます。サクシュ琴似川もそのひとつで、いわば豊平川のかつての本流を跡づけたのです。川筋をたどると、その痕跡を読み取ることができます。

サクシュ琴似川は戦後、ほかの小さな川と同じように水の流れを失いました。現在の流れは2004年(平成16年)に藻岩浄水場からの放流水により再生させたものです。この川が今も水をたたえているのは、この再生事業のたまものといえます。

では、この川を再生させたことにはどんな意味があるのでしょうか。川の跡と現在の流れをたどりながら、この川が札幌の自然と人々の営みに果たした役割を振り返り、再生の意味を考えてみましょう。



豊平川流路変遷図(札幌市博物館活動センター作成)
豊平川(古いサッポロ川)は、約1万年をかけて西から東へ流路を変えて、現在の位置に落ち着いた

C サクシュ琴似川？サクシュコトニ川？

この川は、札幌市管理区間と北海道大学管理区間に分かれています。札幌市管理区間の河川名としては「サクシュ琴似川」ですが、北海道大学構内の標識などでは「サクシュコトニ川」と表記されています。そもそもアイヌ語に由来し、「サ・クッ・コトニ」が原音に近い発音のようです。

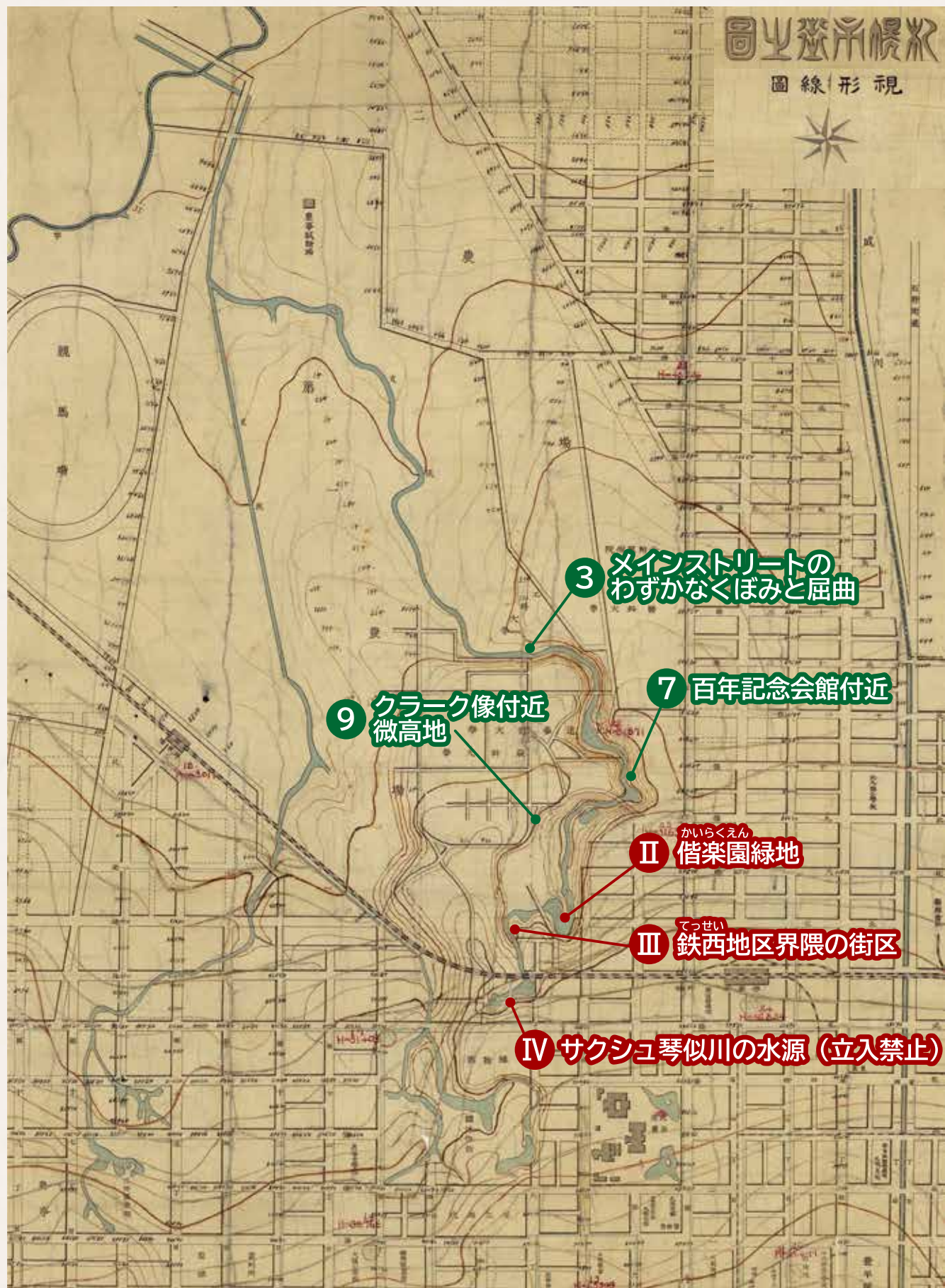
本マップでは表記揺れによる混乱を防ぐため、「サクシュ琴似川」という書き方に統一しています。

サ・クシ
＝浜の方を通る
コトニ(コッナイ)
＝くぼんだところ
※ここでいう「浜」は、豊平川の
河原を指すとみられます。

D 大正時代のサクシュ琴似川

下図は、1924年(大正13年)のサクシュ琴似川周辺を示した地図です。地図に描かれた細い実線は、1尺(約30cm)ごとの等高線を示しています。水色の線は河川を示しており、サクシュ琴似川以外の中小河川を見て取れるだけでなく、大正時代の地形も精緻に読み取ることができます。

裏面地図「主な見どころ」の一部を●●の番号で示しています。現在の地図と昔の地図を見比べながら歩くのも、おすすめです。



『札幌市街之図 視形線図』1924年(大正13年)札幌市公文書館蔵

E 川と植物と人の関わり

サクシュ琴似川流域の遺跡からはサケの骨が出土することから、かつてはサケ漁が行われていたと考えられます。

その一例として、百年記念会館周辺やエルムトンネル周辺で見つかった遺跡では、定置漁具(川などに杭列を設置し、魚を捕獲するための施設)と思われる木杭が見つかりました。この木杭は擦文文化やアイヌ文化のものと見られ、湿地に多く生えるヤナギ属(パッコヤナギ、エゾノカワヤナギなど)やトネリコ属(ヤチダモ、アオダモなど)の樹木が使用されていることから、河川沿いで容易に入手できる木材が材料として活用されたことがうかがえます。

当時のサケ漁を知る手がかりであると共に、樹木を利用した人々と自然環境の関わりを感じられます。



K39遺跡(エルムトンネル付近)で検出された杭列
(9世紀後半～10世紀初頭頃)
(札幌市埋蔵文化財センター蔵)



平澤屏山「アイヌ風俗十二ヶ月屏風」
(市立函館博物館蔵)

！大学構内散策におけるルール

①入構時のルール

北海道大学は、地域に根ざした教育・研究機関を目指し、キャンパスの一部を開放しています。皆様の安全確保と円滑な大学運営のために、大学構内へ入構する際は、右記二次元コードからホームページへアクセスし、注意事項をご覧ください。

特に、倒木及び落枝による事故には充分ご注意ください。入構時に発生した事件・事故等に関して、大学は一切の責任を負いませんのであらかじめご了承ください。

②立入禁止のルール

生態保全緑地、研究用農地、花壇、農場への立入は禁止です。
(※生態保全緑地：恵迪の森、遺跡保存庭園、川周辺などで歩道以外)

入構時のルール



③生態環境保全方針に基づくルール

キャンパスにおける適正な生態環境の保全と維持管理のために、方針を定めています。芝生を含む植生等に損傷が生じた場合、使用者の責任で現状回復していただくことがあります。下記ルールを順守してください。

■緑地

- ・球技等の運動
- ・自動車、自転車、台車の乗り入れ
- ・大人数での同じ場所の踏み込み
- ・重量物を長時間設置するなどの芝生に強い負荷を与える活動
- ・樹木の根の周辺の踏みつけ
- ・その他植生に強い負荷を与える行為

■川

- ・川への立ち入り
- ・置き石の移動
- ・川底の掘り起こし
- ・壊し止め
- ・川にごみ、飲食物、枝等を流す行為



生態環境保全方針



F サクシュ琴似川のせせらぎ再生

都市化により涸れてしまったサクシュ琴似川。この河川に清流が復活した経緯をご存じでしょうか。実は、北海道大学と札幌市の協力によってもたらされたのです。札幌市の「水と緑のネットワーク事業」では、都市化の進展などにより水質悪化や水量減少に見舞われた市内の河川に、他の河川から導水することで水質や水量を改善し、健全な水辺環境の創出を図る事業を行っています。

北海道大学では、創基125周年記念事業として、キャンパス内の埋められた河川を再生する「サクシュコトニ川再生事業」を実施することとなりました。

これらふたつの事業に加え、北海道大学キャンパス北部のエルムトンネルの工事に伴い流路変更が必要になったこと、藻岩浄水場の放流水が従来の循環利用から河川放流に切り替えになったこと、導水管として廃止水道管の再利用が可能であったことなどいくつかの好条件が重なり、2001年(平成13年)から工事が始まりました。

その後工事完了に伴い通水式が行われ、2004年(平成16年)、約半世紀ぶりに清流が復活しました。札幌の都心を流れる河川が再生されたのです。現在では、大学関係者のみならず、市民や観光客の憩いの場となっていることに加え、2019年(令和元年)には北海道大学構内までサクラマスの遡上が確認され、豊かな生態系と原風景の復活がもたらされました。



「3D都市モデル(Project PLATEAU)札幌市(2020年度)」(国土交通省)(<https://www.geospatial.jp/ckan/dataset/plateau-01100-sapporo-shi-2020>)を加工作して作成

G サクラマスってどんな魚？

サクラマスはサケ科の魚です。川で生まれた稚魚のうち、川から海に下って再び川に帰ってくるものを「サクラマス」、川で一生を過ごすものを「ヤマメ」と呼び分けています。サクラマスもヤマメも同じ魚です。

サクラマスは、春の雪解け時期に海から川に遡上してきます。その後、大雨などによる川の増水を利用しながらさらに遡上し、9～10月頃には上流の産卵ができる場所にたどりつきます。

サクラマスという名前の由来は、「産卵時期を迎えると体色が桜のようなピンク色に変化するから」「桜が咲く時期に遡上するから」など様々な説があります。

サクシュ琴似川から下流に進んでいき、桑園新川、琴似川、新川へとつながっていき、最後は石狩湾にそそぎます。サクシュ琴似川から海までは、なんと10km以上の距離があります。川の流れに逆らって、これだけの距離を泳いで遡上してくるサクラマス。生き物の力強さを感じられますね。



ヤマメ



サクラマス